

# 漣 痕

角 靖 夫

**漣 痕** (リップル・マーク: ripple marks) は地層の層面によく見かける形象で 現在でも同様なものが浅い水底や潮が引いた浜辺の砂・泥の上に 波や流水によって形成され また風によって陸上の砂の表面にもできるから 理解しやすい。これは弱い水の運動で底質が局部的に動いて生じるものである。

形成過程が目の方に見られる漣痕については 故服部富雄氏が病床で訳したカナダの本“浜辺の砂は生きている”(地質ニュース105号)で手軽に知られる。

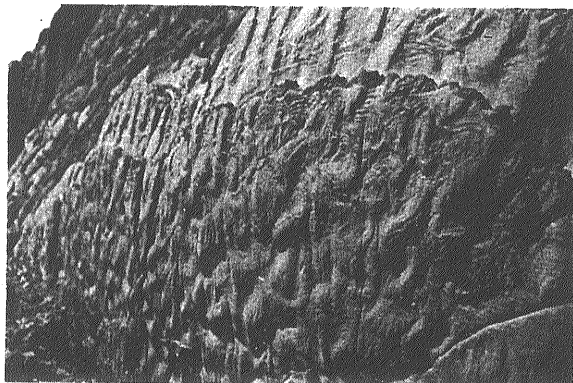
水成層中の漣痕は いろいろな形容や型式区分を与えられているが 最も普通には次の3種の型を基本としてとり扱われる(各型の和名は筆者の仮訳)。

**揺動型漣痕 (Oscillation ripples)** 水流の影響を受けず波の攪拌作用だけで形成される。横断面は第43図のように対称的波形で 一般に 波峰は尖り気味が少し丸みをもち波谷はゆるい丸みをおびる。上下には同様な波形の葉理が波頂をそろえて重なる。

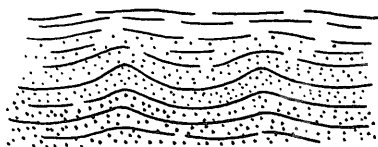
**水流型漣痕 (Current ripples)** 流水によってできるもので 横断面を見ると第44図のように 水流の上流側が緩 下流側が急な非対称的波形で 波峰と波谷は丸みをおびほとんど同じ形をしている。この波形の下は下流側の傾斜に平行する細かい葉理をふくんだ層からなり立っており 表面は波谷に粗粒で重い粒が 波頂に細かいものが下流側斜面上に軽い物質が集まっている。波峰は水流方向と直交して伸びる。第45図は川水でできたばかりの好例である。水流が強過ぎる場合には異様な形の層ができる。(19頁右下へつづく)



第41図 紀伊半島南部古第三紀牟婁層群の砂岩にみられる水流型らしい漣痕(水野技官撮影)

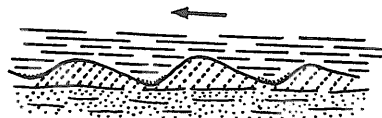


第42図 紀伊半島南部古第三紀牟婁層群の砂岩にみられる漣痕 成因は遡断できない(水野技官撮影)

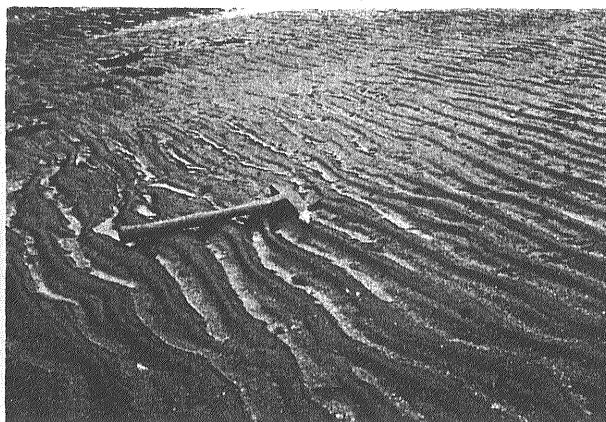


第43図 揺動型漣痕の断面

第44図 水流型漣痕の断面 矢印は水流の方向



第46図 紀伊半島南部古第三紀牟婁層群の漣痕の多い互層(水野技官撮影)



第45図 佐世保炭田鹿町神林の海岸 川水はハンマーの頭から柄の方向へ流れていた(長浜技官撮影)